

Oracle9i Database

マニュアル改訂情報

リリース 2 (9.2.0.2)

2002 年 12 月

部品番号 : J07213-01

Oracle9i Database マニュアル改訂情報 リリース 2 (9.2.0.2)

部品番号 : J07213-01

原本名 : Oracle9i Database Documentation Release Notes Release 2 (9.2.0.2)

原本部品番号 : B10280-01

Copyright © 2002, Oracle Corporation. All rights reserved.

Printed in Japan.

制限付権利の説明

プログラム（ソフトウェアおよびドキュメントを含む）の使用、複製または開示は、オラクル社との契約に記された制約条件に従うものとします。著作権、特許権およびその他の知的財産権に関する法律により保護されています。

当プログラムのリバース・エンジニアリング等は禁止されております。

このドキュメントの情報は、予告なしに変更されることがあります。オラクル社は本ドキュメントの無謬性を保証しません。

* オラクル社とは、Oracle Corporation（米国オラクル）または日本オラクル株式会社（日本オラクル）を指します。

危険な用途への使用について

オラクル社製品は、原子力、航空産業、大量輸送、医療あるいはその他の危険が伴うアプリケーションを用途として開発されておりません。オラクル社製品を上記のようなアプリケーションに使用することについての安全確保は、顧客各位の責任と費用により行ってください。万一かかる用途の使用によりクレームや損害が発生いたしましても、日本オラクル株式会社と開発元である Oracle Corporation（米国オラクル）およびその関連会社は一切責任を負いかねます。当プログラムを米国国防総省の米国政府機関に提供する際には、『Restricted Rights』と共に提供してください。この場合次の Notice が適用されます。

Restricted Rights Notice

Programs delivered subject to the DOD FAR Supplement are "commercial computer software" and use, duplication, and disclosure of the Programs, including documentation, shall be subject to the licensing restrictions set forth in the applicable Oracle license agreement. Otherwise, Programs delivered subject to the Federal Acquisition Regulations are "restricted computer software" and use, duplication, and disclosure of the Programs shall be subject to the restrictions in FAR 52.227-19, Commercial Computer Software - Restricted Rights (June, 1987). Oracle Corporation, 500 Oracle Parkway, Redwood City, CA 94065.

このドキュメントに記載されているその他の会社名および製品名は、あくまでその製品および会社を識別する目的のみ使用されており、それぞれの所有者の商標または登録商標です。

目次

1 Oracle9i マニュアル改訂情報リリース・ノート リリース 2 (9.2.0.2)

Oracle9i データベース管理者ガイド	1-3
DISPATCHERS 初期化パラメータ	1-3
Oracle9i データベース概要	1-3
Oracle9i PL/SQL パッケージ・プロシージャおよびタイプ・リファレンス	1-3
Oracle Text リファレンス	1-4
バックアップとリカバリに関するドキュメント	1-4

Oracle9i マニュアル改訂情報 リリース・ノート リリース 2 (9.2.0.2)

このリリース・ノートは、リリース 2 (9.2.0.1) で発行されたドキュメントの改訂です。
次のマニュアルは再発行されています。

部品番号	タイトル
J06272-01	Oracle Data Guard 概要および管理
J06322-01	Oracle Enterprise Manager 構成ガイド
J06325-01	Oracle Intelligent Agent ユーザーズ・ガイド
J06260-01	Oracle9i データベース移行ガイド
J06241-01	Oracle9i データベース新機能
J06248-01	Oracle9i データベース・パフォーマンス・チューニング・ガイドおよびリファレンス
J06256-01	Oracle9i データベース・リファレンス
J06254-01	Oracle9iNet Services 管理者ガイド
J06282-01	Oracle9iNet Services リファレンス・ガイド
J06275-01	Oracle9iReal Application Clusters セットアップおよび構成
J06261-01	Oracle9iSQL リファレンス
J06285-01	Oracle9iStreams
A96620-02	Oracle9iXML Database 開発者ガイド - Oracle XML DB

このリリース・ノートには、次のドキュメントに関する修正が記載されています。

- [Oracle9i データベース管理者ガイド](#)
- [Oracle9i データベース概要](#)
- [Oracle9i PL/SQL パッケージ・プロシージャおよびタイプ・リファレンス](#)
- [Oracle Text リファレンス](#)
- [バックアップとリカバリに関するドキュメント](#)

参照： リリース 9.2.0.2 の機能上の変更については、製品のリリース・ノートを参照してください。

Oracle9i データベース管理者ガイド

これらは『Oracle9i データベース管理者ガイド』に関する修正です。

DISPATCHERS 初期化パラメータ

このリリースでは、ALTER SYSTEM 文の DISPATCHERS 初期化パラメータに対して SCOPE 句はサポートされません。第 2 章の初期化パラメータの管理に関するセクションでは、これに関する記述がありません。

現在のインスタンスの DISPATCHERS パラメータを再構成するには、SCOPE 句を入れずに ALTER SYSTEM SET DISPATCHERS 文を発行します。新しい構成を永続化するには、データベースを起動する前に、初期化パラメータ・ファイルで DISPATCHERS パラメータの設定を指定します。サーバ・パラメータ・ファイル (spfile) を使用してデータベースを起動している場合は、CREATE SPFILE 文を発行して、初期化パラメータ・ファイルから spfile を再作成する必要があります。

参照: 『Oracle9i データベース管理者ガイド』

Oracle9i データベース概要

『Oracle9i データベース概要』の第 1 章にある「Oracle Internet File System」項は、このマニュアルでは掲載されなくなりました。Oracle Internet File System は、Oracle9i データベース リリース 2 (9.2) には含まれていません。

参照: 『Oracle9i データベース概要』

Oracle9i PL/SQL パッケージ・プロシージャおよびタイプ・リファレンス

- 第 8 章「DBMS_CAPTURE_ADM」にある STOP_CAPTURE プロシージャの force パラメータに関する記述を、次と置き換えてください。

将来使用するために予約されています。現在のリリースでは、有効な BOOLEAN 設定は無視されません。

- 第 29 章「DBMS_LOGSTDBY」に記載されている INSTANTIATE_TABLE プロシージャのパラメータの順序が不適切です。適切なパラメータの順序は次のとおりです。

```
DBMS_LOGSTDBY.INSTANTIATE_TABLE (
    schema_name IN VARCHAR2,
    table_name   IN VARCHAR2,
    dblink       IN VARCHAR2);
```

ロジカル・スタンバイ・データベースは BLOB データ型をサポートしますが、DBMS_LOGSTDBY.INSTANTIATE_TABLE プロシージャは BLOB データ型をサポートしません。

この記述では、DBMS_LOGSTDBY パッケージがスキーマおよび表の名前で大/小文字を区別する旨の説明が必要です。DBMS_LOGSTDBY パッケージでスキーマおよび表の名前を使用する場合は、大/小文字を正しく記述するように注意してください。たとえば、次の文は OE.TEST の変更をスキップする SKIP プロシージャですが、不適切な構文と正しい構文を示します。

不適切な文:

```
execute dbms_logstdby.skip('DML', 'oe', 'test', null);
```

名前が小文字で指定されているため、これらの列を更新するトランザクションはロジカル・スタンバイ・データベースに適用されます。

適切な文:

```
execute dbms_logstdby.skip('DML', 'OE', 'TEST', null);
```

- 第 72 章「DBMS_STREAMS」では、論理変更レコード (LCR) を SYS.Anydata キューから型指定キューへ伝播するときに、ルールベースの変換で CONVERT_ANYDATA_TO_LCR_DDL ファンクションおよび CONVERT_ANYDATA_TO_LCR_ROW ファンクションを指定できると説明されています。しかし、ルールベース変換はこのような伝播では現在サポートされていません。したがって、SYS.AnyData キューと型指定キューの間で LCR が伝播されるように構成するには、DBMS_TRANSFORM パッケージで変換を指定する必要があります。
- 第 108 章「論理変更レコードのタイプ」で、SYS.LCR\$_ROW_RECORD タイプのメンバー・ファンクション GET_LOB_INFORMATION、GET_VALUE および GET_VALUES に、新しいパラメータの use_old が追加されました。これらのメンバー・ファンクションにおける use_old パラメータの詳細は、『Oracle9i Streams』の第 16 章、「その他の Streams 管理タスク」を参照してください。

参照：『Oracle9iPL/SQL パッケージ・プロシージャおよびタイプ・リファレンス』

Oracle Text リファレンス

- リリース 9.2 では、INPATH、HASP_PATH および CTX_DOC.HIGHLIGHT、CTX_DOC.MARKUP に関して、INPATH および HASP_PATH に対するハイライトがサポートされない旨の記述はありません。
リリース 9.2.0.2 ではこの制限はなくなりました。CTX_DOC.HIGHLIGHT および CTX_DOC.MARKUP を使用して、INPATH および HASP_PATH 演算子で問合せをされた XML ドキュメントをハイライトできます。詳細は、『Oracle9i XML Database Developer's Guide - Oracle XML DB』の第 7 章を参照してください。

参照：『Oracle Text リファレンス』

バックアップとリカバリに関するドキュメント

次は、『Oracle9i Recovery Manager リファレンス』に関する訂正です。

- allocOperandList の BLKSIZE パラメータに関する記述で、BLKSIZE の値はデータベース初期化パラメータ DB_BLOCK_SIZE の倍数である必要もあります。この制限は、バックアップされるデータファイルのブロック・サイズに関係なく、常に適用されます。
BLKSIZE を DB_BLOCK_SIZE の倍数以外の値に設定した場合、チャンネルを割り当てようとすると Recovery Manager がエラーを発行します。
- BACKUP コマンドの例のセクションにある「差分増分バックアップの実行: 例」では、ADD DATAFILE の後に新しいバックアップを作成するように指示されています。データファイルを追加した後はレベル 0 バックアップを取る必要はありません。Recovery Manager はデータファイルの追加を検出し、次に増分バックアップを取る場合は、直後に追加されたファイル以外のすべてのファイルに対しては増分バックアップを行い、追加されたファイルに対しては自動的にレベル 0 バックアップを取ります。

次は、『Oracle9i Recovery Manager ユーザーズ・ガイド』に関する訂正です。

- 第 5 章「概念 I: チャンネル、バックアップおよびコピー」の「物理的なブロック破損の検出」には、Recovery Manager ではすべての種類のブロック破損を検出できないような誤解を与える注意が含まれています。次の構成で実行すると、Recovery Manager は検出可能なすべての種類のブロック破損を検出できます。
 - 初期化パラメータ・ファイルで、DB_BLOCK_CHECKSUM=TRUE とセットします。
 - Recovery Manager の BACKUP および RESTORE コマンドでは、MAXCORRUPT オプションは指定しないでください。また、NOCHECKSUM オプションも指定しないでください。ただし、CHECK LOGICAL オプションは指定します。
- 第 5 章「概念 I: チャンネル、バックアップおよびコピー」の「バックアップの保存方針」では、増分バックアップに関する説明が不明確です。REPORT OBSOLETE および DELETE OBSOLETE コマンドは、次の 2 つのステップで機能します。
 - 保存方針 (REDUNDANCY または RECOVERY WINDOW のいずれか) で不要とは定義されない、フル・バックアップまたはレベル 0 バックアップ、あるいは各データファイルのコピーのうち、最も古いものを識別します。これよりも古いフル・バックアップまたはレベル 0 バックアップはすべて不要になります。

- Recovery Manager は、不要と判断されないフル・バックアップの最古のものよりも古い、レベル 1 以上のアーカイブ・ログおよび増分バックアップを不要と判断します。これらは、適用可能なフル・バックアップまたはレベル 0 バックアップが存在しないために不要と判断されません。レベル 1 以上の増分バックアップはアーカイブ・ログと同様の機能を持つ（フル・バックアップの時間が進む）ため、保存方針に関してはアーカイブ・ログとして扱われます。

参照：

- 『Oracle9i Recovery Manager リファレンス』
- 『Oracle9i Recovery Manager ユーザーズ・ガイド』

